

# 第51回日本皮膚免疫アレルギー学会 総会学術大会を終えて

佐藤 貴浩

防衛医科大学校皮膚科学講座教授

## はじめに

2021年11月26日から28日にかけて第51回日本皮膚免疫アレルギー学会を開催させていただきました。本誌読者の方々にはあえて申し上げるまでもありませんが、本会は日本皮膚アレルギー学会と日本接触皮膚炎学会が2007年に合併し、さらに皮膚脈管膠原病研究会も取り込んで、2018年より日本皮膚免疫アレルギー学会なる名称となってこれまで発展してきた組織です。本会のお引き受けを決めてから当日までの表話、裏話をご紹介します。

## 引き受けて大丈夫？

本会の開催打診を受けたのは4年ほど前になります。かつて東京医科歯科大学在職中に前身である日本皮膚アレルギー学会第33回学術大会で西岡清会長のもと事務局長を務めさせていただいた経験がありました。もちろんその当時の私には自らが将来開催することになろうとは想像もできませんでしたが……。当時はとにかく事務局長の業務が多く、ネット環境やメールなどのやりとりもいまのように日常的ではありませんでした。各種連絡、打ち合わせ、書類作成や発送など膨大な作業があり、とにかく消耗した記憶しか残っていません。防衛医科大学校皮膚科はこじんまりとした教室です。特殊な環境下にあり、「関連病院」や「医局員」というのは、多くの大学でいうところのそれらとは別物で、いわばあってないようなものです。防衛省組織として各種制約も予測される中、はたして担当で

きるのか正直なところ大きな不安がありました。

## 台風でなくコロナにあたる

本会は規定上、9月から12月の間に開催する必要があります。しかしこの期間は学会や講演会予定がひしめいています。日本皮膚科学会東京支部総会の開催日がかつての2月から前年秋に移動してからはさらに過密度が増しているのはご存じの通りです。そのため開催できる日は極めて限られてい



図1 学会場となった京王プラザホテル入り口の表示

ました。開催場所は埼玉県内観光地、防衛省関連施設、都内ホテルなど検討対象にしましたが、参加者の利便性、収容人数、使い勝手などから結局のところ京王プラザホテルに落ち着いたのです。いうまでもなく秋の学会開催では台風の来襲がもっとも大きな懸案事項になります。決定した当時は11月末の開催だから安全だろうと高をくくっていましたが、まさか台風でなく新型コロナウイルスが来襲するとは……。とにかく都内開催に決まり、埼玉のよさ(そんなものがあるかどうかわかりませんが……)をアピールすることは叶わず、ごく普通にありがちの学会にはなりましたが、新型コロナウイルス感染の蔓延を思えば、それもよしとしなければと思っています。

## やはり悩みは開催形式

開催テーマは「Active Immunodermatoallergy—アグレッシブな皮膚アレルギー診療をめざして—」というごくごくわかりやすいものにしました。プログラム巻頭にも書きましたように、みた現象や面白いと思う症例をもう一步踏み込んでアプローチしていこうという思いを込めています。お気づきの方がどれほどいらっしゃるかわかりませんが、学会ポスターおよびプログラム表紙は秩父長瀨をイメージしたものです。ブルーインパルスも飛んでいます。これはオリンピック開会式当日の飛行計画が公になるはるか前に作成したもので、偶然です。

どこの学会も同じと思いますが、開催形式はギリギリまで迷いました。コロナ発生当初は学会をやるころにはさすがに収束しているだろうと気楽に考えていました。しかし年が明けると感染状況はむしろ悪化、感染の波は予測が困難、ワクチン接種が進んでも11月には大きな波が来るであろうというAI予測もありました。現地での対面方式開催はかなり早い時期に諦めました。しかし、完全Webかハイブリッド開催かは大きな問題でした。何が問題かといえばそれはもちろん運営経費です。各支部総会が2日間の開催であるのに対し、規模は小さいながら本会は3日間の開催であり、会場費も諸



図2 A会場内の様子

経費もそのぶんかさみます。ハイブリッド経費だけみても、招宴会、レセプション経費が飛んでしまうほどの額になります。現地参加者数は少ないので、展示を控える企業は非常に多く予算収入は思うように伸びません。赤字の不安が常によぎります。結局ハイブリッド開催に腹を決めたのは9月の終わりごろでした。感染者数の減少が始まっていたのも後押ししました。実は感染がどんどん収まってくると、今度はハイブリッドでなく現地対面式で開催ができるのでは？という浮気心が出たのも事実です。

## 心配しなくても勝手に終わる？

学会の主な講演やシンポジウムなどの詳細はプログラムにもありますので、割愛させていただきます。よくいわれることですが、学会は無事に初日を迎えれば、あとは自然に流れて終わるので何も心配はいらないというのは当たっている面があります。もちろんそれは、種々の講演、座長含めてご参加くださる方々のご協力があったことです。ただハイブリッド形式になりますと、やはりシステムトラブルなど予期せぬ事態がおこるリスクは増えますので、始まってからも気は抜けません。でも今回の運営は日本皮膚科学会の山田紀子さん率いる学会チームのみなさんでしたので、抜け目のない準備とリスクマネジメントで安心していられたのがありがたいかぎりでした。また事務局長を務めた端本宇志講師の奮闘も功を奏し、終わって



図3 会長挨拶

みれば参加者は1,000人を超えており、また当日現地入りされた参加者も非常に多かったように感じます。むしろ会場が密になってしまう心配があったほどです。

## ハイブリッドって続けられる？

ハイブリッド形式を要望する参加者は多いように聞いています。たしかに出張しなくても参加、視聴、講演、座長ができます。開催する側からみますと、各地から気軽に参加できるぶん、登録参加者数の増加を期待できます。しかし前述しましたようにハイブリッド設備の経費、人件費は大きな問題です。開催後の各セッションのオンデマンド配信もその範囲と配信期間でそれなりに費用がかさみます。その一方で、現地入り参加者が少なくなることを危惧してスポンサードセミナーを控える企業もありますし、企業展示に至っては大幅に減少します。メリットといえば、海外講演者の方の旅費や滞在費を削減できることくらいでしょうか(細かい話ではありますが、海外招聘はわりと大きな額にはなりますから)。これまで大々的なレセプションや会長招宴会が慣例となってきましたが、新型コロナウイルス感染終息後もハイブリッド形式を継続し、しかも宴会・レセプションなどを含めその他は従来通りに再開するとなると予算がもたない会も出てくるのではないかと考えています。

学会ですから学術的な内容の充実が重要なわけですが、いかに快適に参加者に過ごしていただ



図4 休憩時間には航空自衛隊音楽隊の演奏映像が流れました。

るか、おもてなしができるかも大会長としては気にするところでしょう。どのような形式にするかは大会長に一任されますが、やはり今後の在り方についてなんらかの申し合わせのようなものがあるとありがたいと思う次第です。

## おわりに

ご講演や座長などを多くの先生方がお引き受けくださったこと、そして予想以上に多くの方々がご参加くださったことは何よりありがたく、心より感謝申し上げます。学会の良し悪しや率直な意見、不満は大会長の耳には届きにくいものです。開催当日のコロナ感染状況が読めない中でバタバタとした準備となり、思いつくかぎりの経費削減も行いました。参加者の方々にとっては必ずしも居心地のよい学会でなく、サービスも行き届いていないと感じられたことでしょう。それでも大きなトラブルがなく終了し、その後感染クラスターもおこらなかったことにほっとしております。そして学会終了直後の11月末にオミクロン株が登場し、後に急速かつ爆発的に拡大したことを思いすると、ギリギリのタイミングで開催できたことは幸運でした。何しろ、まがりなりにも防衛省組織である当教室が感染蔓延の原因になったりしたら内外から非難の嵐(?), なんらかの処分も覚悟せねばと心配していましたから。